

まことに静かな晩餐である。この食卓は先生が日本へいらした其當時から先生におつかへ申してゐたのだといふ。先生は何でも古いものゝ事を「ぢぢ」と仰るのでこの食卓の事も「ぢぢテーブル」と仰る。此ぢぢテーブルの上では先生の學生さん達が色々先生との貴いお話を伺ひつゝしばしば御ちさうになつたのである。或時はその下で先生の可愛がついていらつしやる猫までが小さいお皿へ同じ御ちさうを分けていたゞいて居た。私はこの由緒ある食卓へ先生と共に坐つた最後の者である事を有がたく思ふ。先生は今夜はもう最終の東京の夜であるから機嫌よくしてゐよと仰られる。何くれとかはるこ

となくお話をして下さるのをともすれば一ぱいになる胸をおさへて伺つて居る（十二日の横濱御出發のびてまだしばらくお目にかかる事が出来やうとは其時誰が思ひかけやう）。それから稽古をするのによい曲や讀むのによい本などを色々教へて下さる。さまざま御馳走をいたゞいたあと、特にこしらへさせて下さつたアイスクリームや、久保様がむいて下さる水蜜桃を葡萄酒にひたしていたゞいたりした。

この夜はまだ少しおかたづけものなどが残つておいでなのであまり長くおさまたげしてはおわるからうとそろゝ立つ。先生はいつものとほりにして別れやうと仰る。私もやうゝごきげんようだけをまをし上げた。御門へまがる處でふりかへつたらば、お玄關の處にまだ見送つてゐて下さつた先生のお姿が電燈の下に大きくにじんで見えた。夏の宵とはいへ駿河臺はひっそりしてゐた。なつかしくかなしい思ひにふけりつゝゆくにふさはしい夜であつた。

或時先生が「此頃は何を弾いてゐるか」とおきゝになつた。私

は「私のはシュペーレンでなくアルバイテンで御座います。ベートーベンのソナタで御座いますが」といふ。先生はお笑ひになつて「アルバイテンならばまだよい。ツアンケンでなければ」と仰つた。なるほどピアノに喧嘩をふきかけて居る様なや、ピアノと組打ちでもしてゐる様なや——一寸をかしくなる。

或時、私が「東京は横濱よりさむい様で御座います。何もかもこほります」といつたら、先生は「さうかい。それでは音楽もこほるかい」と仰られた。

〔追記〕三点の写真は、神田、月刊『本の街』の編集者中西隆紀氏の紹介で久保勉氏の未亡人久保いと氏から提供していただいた。また、中西氏によるケーベル博士関係の詳細な資料研究からは大変に負うところが多かった。それは月刊『本の街』七十号と七十六号（昭和六十一年と六十二年）に連載されている。

(三) アウグスト・ユンケル August Junker (一八七〇—一九四四)

在職期間 明治三十二年—四十五年（一八九九—一九一三）

お雇外国人教師

担当科目 管絃樂、実技一般

履歴（要約）

一八七〇年一月二十七日、ドイツのチュヒェン〔Tüchen 上部東ドイツ〕で生れる。

一八七六年、父からヴァイオリンの手ほどきを受ける。

一八八一年、ケルン音楽院に入学、ケーニゲオーおよびホルンデル教授に師事。

一八八七年、ケルン音楽院卒業。在学中成績優秀につきヴァイオリンの大

家ヨアヒムの推選学生となり三年間研鑽を積む。その後ベルリン・フィルハーモニー・オーケストラ、ケルン・オーケストラの首席ヴァイオリン奏者をつとめ、また独奏者として活躍し、ドイツ国内に名声をはせた。一八九一年、ボストン・シンフォニー・オーケストラの首席ヴァイオリン奏者となる。

一八九三年、シカゴ・オーケストラ独奏者に迎えられる。

一八九七年（明治三十二年）、シカゴ・オーケストラを辞任したユンケルはドイツ、スイス、イタリア、エジプト、インドシナを経て横浜にやってきた。ここで英国人が経営するリーディング商会に入り、音楽書や楽譜の販売の仕事しながら演奏活動を行っていたところ、幸田延の推薦で東京音楽学校の雇い外国人教師となった。受持は管弦楽、声乐、和声学、作曲法、合唱、つまりピアノを除き音楽の実技全般である。文部省への届出書類に担当「音楽」と記入されていたのはもともとである。身分は奏任高等官五等以上の取扱い、月給は四〇〇円、一日平均四時間の授業が課せられている。着任早々四月二十一日、時の皇后陛下（照憲皇太后）の行啓に際し、ケibel博士のピアノ伴奏でルービンシュタインのヴァイオリン・ソナタを御前演奏した。

ユンケルの弦楽合奏から徐々に管弦楽へと指導によって、東京音楽学校の管弦楽は目ざましい進歩を遂げ、定期演奏会には必ずオリジナルの管弦楽曲が演奏されるようになった。ユンケルの指揮下に東京音楽学校が初演した主要な曲目は、バッハ「クリスマス・オラトリオ」から「シンフォニア」。ベートーヴェン、交響曲第三番、ピアノ協奏曲第三番。ビゼー「カルメン」組曲、「アールの女」組曲。ブラームス「ヘドイッ・レクイエム」。ブルッフ「美しきエレン」。ケルビーニ「ヘルクイエム」。ドヴォルザーク「ヘスラヴ舞曲」。ギリーク「ペール・ギュント」組曲第一番。メンデルスゾーン、交響曲第三番「スコットランド」。シューベルト「未完成交響曲」。ヨハン・シュトラウス「美しき碧きドナウ」。ウエーバー「魔弾の射手」序曲、「オペロン」序曲など。ここに到達するまでの並々ならぬ苦勞は想像を絶するものである。一人でなんでも指導

しなければならなかったユンケルの思い出を、当時生徒であった岡野貞一氏は次のように語っている。「楽器ははじめてやるものがほとんどで、私はヴァイオリンをやっていたので、同じ弦楽器だからチェロをやれと先生はおっしゃった。弾き方がわからないと云ったら、わたしが教えてやると云ってやって見せてくれた。ところがどうも具合が悪い。先生もヴァイオリンをやっていたから弓の持ち方もやはりヴァイオリンと同じ様な積りで毛の方を上に向けてやっていた。初め暫くはそういうやうにして教はった。ユンケル先生も気付いていたかいなかったか、兎に角そのまゝやっていた。所が暫らくしてからの事、その頃やはりユンケル先生は横浜の外人の素人連中のオーケストラを組織していらつしたやうで時々そちらへおいでになった。其の方で教わっていらつしたか或る時『セロといふものは、弓はさう持つものではない』と云って毛を下の方へ向けてやって見せて下さった。どうもその方が工合が良かったのですね。初めはヴァイオリンと同じやうにやつたから一向に力が入らない。そんな有様でした」（『教育音楽』第十三巻四号、昭和十年）。

また合唱の時間の思い出を井出茂太氏（明治三十六年甲種師範科卒業、昭和四十二年四月十二日没）は「一寸でも音程がちがったら満座の中でも、何の容赦もなくユウアローンと一人づつ立たせて何度でもやり直され、一つくく大声でドナリツケられるので実に怖い先生であった。怖が合唱がよくできたときは又実に嬉しそうな顔でほめられるので、怖しいが又たのしい時間でもあった」となつかしんでいる（『同声会会報』二九一号、昭和四十年）。合唱の教科書に「コールユーブンゲン」を使い始めたのもユンケルであった。

彼は明治三十二年以来契約を六回更新し、四十五年三月三十一日で雇教師としては契約期限が満期となったが、十二月まで嘱託講師となり、大正元年十二月一日の第二十七回定期演奏会の指揮を最後に東京音楽学校を去った。この間明治三十八年九月、プロシヤ政府（ドイツ）から「プロシヤ國音楽ディレクトル」の称号が贈られ、翌年六月、明治政府より勲五等旭日章下賜、四十四年三月、プロシヤ政府からさらに「音楽プロ

フェッソル」の称号を授けた。四十五年六月、身分取扱いは勅任に準ずることになり、解雇帰国後、大正二年二月十三日、勲三等瑞宝章が下賜された。

東京音楽学校におけるユンケルの直弟子には声楽で戸倉ヤマ、杉浦千歌、柴田環（三浦）、安藤恒（のちの太田）、青木兒、外山國彦、山田耕筈、原田潤、大和田愛羅、弦では多久寅、川上淳、大塚淳、山田耕筈、信時潔らがいる。ユンケルは大正二年一月五日東京を発ち、神戸に向かいそこから船に乗る予定であったが、実際には十一日午前九時、大勢の弟子たちに見送られて新橋を汽車で発ち、横浜に行き、十一時プリンツルードキッヒ号で帰独の途についた。

(1) ユンケルの帰国旅費は契約時に九百円とされていたが、来日後日本人と結婚し家族が四人となったため、契約金では不足であろうと校長湯原元一は一時手当金として五百円を文部省へ申請して手渡した。

大正二年十一月十五日東京市長の命により日比谷図書館が作成する外国人功労者の伝記について、東京音楽学校はメーソン、ディットリヒとともにユンケルの資料を提出した。

ドイツへ渡ったユンケルはケルンに住み、アーヘン音楽学校教授、アーヘン室内交響楽団指揮者として活躍した。一九三四年（昭和九年）、二十二年ぶりに再来日、十二月十一日東京九段下の軍人会館で教え子一同による盛大な歓迎会が催された。以来武蔵野音楽学校で教鞭をとるかたわら松竹交響管弦楽団の指導に当たった。

昭和十八年十月二十三日土曜日午後二時から東京音楽学校奏楽堂において、日独文化協会と東京音楽学校同声会共催で「アウグスト・ユンケル先生顕彰祝賀会」が行われることになっていった。山田耕筈とユンケル教授自身の指揮の下に演奏を予定していたところ当日の朝脳溢血で倒れ、この日の企画は全部中止された。前日の練習の時非常な喜びで昂奮状態であったということで、それが原因ではないかといわれている。その後自宅で療養していたが、翌十九年一月五日自宅において七十六歳で永眠した。

左記の「ユンケル先生を讃ふ歌」、武島羽衣作の詩は「A・ユンケル先生顕彰祝賀会」でユンケルに捧げる予定であった。

ユンケル先生を讃ふる歌

武島羽衣先生作

(一) 緑染ゆる上野の森に、

楽の技練るあしたゆふべ、

力溢れし御教知りて

枝の小鳥も木蔭の風も、

声を合せて唱ふが如し。

ああ偉なるかな君がいさを。

(二) 君が指揮せしバトンのまにまに、

大絃淙淙 泉はむせび、

小絃切々 真玉はまろぶ。

満堂の人心は酔ひて、

従ふ教へ子 魂 振 ぶ。

ああ深きかな 君がをして。

(三) 功成り名遂げて御齡たかく、

干のをしへ子親とぞ仰ぐ。

しかも今なほ励みて止まず、

声と絃との力によりて、

日独ふたつの親みむすぶ。

ああ高きかな君がほまれ。

(『同声会会報』二九二号、昭和四十年)

ユンケルの家族は夫人鎌田信子と二人の娘の四人で、東京音楽学校に迎え入れられてから住いを横浜から東築地の居留地に移し、日本趣味豊かな生活をたのしんだ。学校にはいつもきちんとハイカラな洋服を着こなし、いわゆる男性的ヴァイオリニストと称され、指揮法に至ってはそのスタイルが良く、タクトの明快さは見る者に非常な美観を与えたというのである。また大変に社交家でチャ目気があって陽気な性格、華やかで賑やかなことが好きであった。東京音楽学校には外国人教師に対して天長節や宮中観桜の宴、外務大臣主催の夜会などへの招待がしばしばあって、ユンケルは必ず積極的に参加した。社交ぎらいなケーベル博士とは全く対照的である。このような性格は東京音楽学校内においても自然大きく影響し、他を圧する勢力をふるっていた。日本の管弦楽の父、あるいはオーケストラも合唱もユンケルなくしてわが国の音楽進歩はなかったと、その業績を賛える一方ではきびしい世間の批判も多かった。このことに関しては第二章第十一節を参照されたい。

(四) ノエル・ペリー Noël Peri (一八六五～一九二二)

在職期間 明治三十二年～三十七年(一八九九～一九〇四)
嘱託講師

担当科目 オルガン、和声、作曲

履歴(要約)

一八六五年八月二十三日、フランス、ヨンス県クルーヂ・ル・シャテル村に生れる。

一八八一年七月リヨン大学入学、文学を専攻。

一八八三年十月リヨン大学卒業、十月、パリの外国宣教会付属神学校に入学、さらに十二月セーヌ県イッソンの私立哲学学院^{Lesly}に入学、この間音楽理論も研究する。

一八八五年七月哲学院卒業。

一八八八年(明治二十一年)六月外国宣教会付属神学校卒業、十一月宣教師として来日、名古屋市および長野県松本市において司祭をつとめるか

たわら語学の教師となった。明治二十九年(一八九六)より住いを東京の麴町区飯田町に移し暁星学校の音楽教師となり、また一方、日本人の雑誌『天地人』を創刊し、仏文書店「三才社」を創立した。明治三十二年(一八九九)十一月三十日、東京音楽学校に招聘されてオルガン、和声、作曲の授業を行うことになった。最初の一年は年報二百円であったが翌年は五百円となり、さらにその翌年は千二百円支払われている。三十五年本郷之町一の三四に転居、三十七年に本務上の都合で辞職した。東京音楽学校在職中、彼の指揮のもとにグルックの「オルフォイス」が上演されたことは有名である(「オルフォイス」の項参照)。明治四十年(一九〇七)当時の仏領印度支那(ヴェトナム)のハノイに行き東洋学院研究員となった。同時に印度支那大学の仏文学講座および東洋学院の日本語教授として活躍していたが、一九二二年六月十九日、ハノイにおいて交通事故にあい、六日後の二十五日に死亡した。ペリーは日本滞在中日本音楽の研究を専門的に行い、ことに能楽に関しては多くの著作を残した。主なものは『能入門』(仏文、『東洋学院學報』九号、一九〇九)、代表能十曲の解釈研究『東洋学院學報』十一号～二十号、一九一〇～一九二〇)、狂言十一曲の仏訳(Da revue Japan et Extrême-Orient, 1924 no. 4-9)、『枕草子』および『東海道中膝栗毛』の仏訳草稿「日本音律論」(『パリ・ギメ』博物館音楽叢書』第二巻、一九三四)など。ほかに仏教、哲学、日本語問題、東洋学などにわたって多数の論文がある。また東京音楽学校における楽式の講義録『楽式一班』^(Lect)という草稿が東京芸術大学附属図書館に保存されている。

(五) アンナ・ラー Anna Laehr (一八四八～?)

在職期間 明治三十三年～三十八年(一九〇〇～一九〇五)
嘱託講師

担当科目 ピアノ

履歴(要約)

一八四八年三月十九日、ドイツ、ブランズウィックに生れる。父からピアノ